



# 越中万葉集

題字 中尾哲雄

1

万葉集を編纂した大伴家持は  
 天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めた。  
 万葉集の四五二六首のうち、家持の歌は四七三首を占めているが、  
 そのうちの二三三首は越中時代に詠んだものである。  
 また、その他の作者を含めると越中万葉歌は三三七首と多く、  
 越中の古代を知るうえでかけがえのない史料となっている。



二上山の大伴家持像



勝興寺境内の歌碑  
 現在の勝興寺(高岡市伏木古国府)の場所には越中の国庁があり、  
 寺井の跡と伝えられる井戸も残る。

ものふの  
 八十娘子らが  
 汲みまがふ  
 寺井の上の  
 堅香子の花

大伴家持

揮毫 江幡 春濤 (日展会友 毎日書道展審査委員)

もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ  
 寺井の上の 堅香子の花  
 大伴家持(巻十九・四四三)

「歌恋 たくさんの乙女たちが入り乱れて水を汲んでいる  
 寺井のほとりには群がて咲いているかたかごの花。」



堅香子(かたかご)  
 堅香子はカタクリのこと。  
 春に咲くユリ科の可憐な  
 花で、万葉集には唯一  
 この歌にだけ登場する。